

## EPISODE 1 TRANSCRIPT - 日本語

こんにちは、皆さん。記念すべき静岡スピークス、第一回目のエピソードへようこそ。ソーニャ・ポールです。日本の言語教育界での皆さんの知らない所でどんなことが起きているのかについて、個人的な経験、教育的見方、他の文化に基づいてお送りしていきたいと思います。また、日本の現在と将来にとってどんなことを意味するのかについてもお送りします。

すべてローカルレベルのものです。静岡県静岡市からじかにお送りします。

皆さんが思っている通り、本当に難しい話題もあります。それで、何回かに分けてお送りすることに致します。

### 今日のトピック

海外の学校に通った生徒にとって、日本の公立の学校に通うとはどのようなことでしょうか？

親が日本人と中国人の丞治はハーフです。ビートボクシングが好きな15歳の少年です。

N3

2008年に日本に帰国するまで丞治は中国と香港の学校に通っていました。日本帰国直前まで北京のインターナショナルスクールに通っていました。彼が通っている静岡市の中学校に行き、話を聞いてきました。

----

ソーニャ：海外でたくさんの国際的な経験をした後に、日本で公立の学校に通うのはどんな感じですか？

丞治：日本の学校の規則というのは本当に複雑です。勉強さえできれば中国の学校やインターナショナルコースでは良かったんです。でも、日本の学校では助け合うことも大切であるということを教わりました。ジェントルマンになるということでしょうか。また、友達に親切にしたり、約束を守るということ大切であるということも学びました。

ジェントルマンになるというのは、少し変に聞こえるかもしれませんが。そこで、丞治は日本の教育基本法を説明してくれました。その中で、教育の目的についてこの様に述べています。“教育というのは人格の成形を目指すものである。平和で民主的な人民となること。個々の価値を尊敬し合い、勤勉に働き、責任強くなければならない。また、心身共に健康であること”と定義されています。

少し長いので、まず初めの文を見て見ましょう。“教育というのは人格の成形を目指すもの”とあります。

## EPISODE 1 TRANSCRIPT - 日本語

この文からは、日本の教育の目的についてこのように言うことができます。勤勉に働く、高い道德基準を持つ良い日本人を育てるということです。ということは、学校の成績やテストは他の国と比べるとそれほど、重要視されないかもしれません。学校なのに成績がそんなに重要視されないなんて、なんか変だと思いませんか？しかし、ある意味では本当です。

まず初めに、日本の教育制度を紹介します。4つの段階に分けることができます。1つ目、小学校は6年間です。2つ目、中学校3年間です。3つ目、高校の3年間です。4つ目、大学の4年間です。生徒たちは次の段階に進む為には、ある程度の成績を修めることが必要です。例えば、中学から高校に入学する為には、入学試験に合格しなければなりません。

実は、日本では高校は義務教育ではありません。2段階目までのみ、つまり小学校と中学校は義務教育です。小学校と中学校はどんな成績であろうと次の学年に進めますし、卒業もできます。先生が成績表を付ける時には、テストの点数だけでなく、クラスでどんな役割をしていたかも評価します。例えば、期末テストで50点だった子はアメリカでは進級できません。しかし、日本では進級できます。なぜなら人格の成形を重視しているからです。

こうした日本の教育の特徴を表す言葉として、“心”があります。

----

スーザン：私の経歴ですか？大学で英語を勉強しました。

ソーニャ：どれぐらい英語を教えているんですか？

スーザン：10年以上でしょうか

スーザンは中学校の英語の先生です。スーザンをいうのは本当の名前ではなく、ニックネームです。

----

ソーニャ：日本の教育制度をいうのは生徒の心を育てるというのをどこかで読んだことがあります。それはどういう意味でしょうか。

スーザン：生徒の感情や思考というのは心からのものです。何も言いたくなかったり、アイデアがない生徒というのは考え方や心を育て成長しなければいけません。

考え方や心を成長されるですか？変に聞こえるかもしれませんが、でも、日本語と英語が出来る人でも日本語の心を英語に訳すのは難しいことです。なぜなら、心にはいろんな意味を含んでいるからです。

## EPISODE 1 TRANSCRIPT - 日本語

文部科学省のディレクターの岡本薫氏は心の意味をこのように定義をしました。岡本氏の本の中で、“心というのは心臓、魂、精神、態度、価値観などを含んでいる”と定義しています。

スーザンが思考と言う時には、岡本氏が定義したものすべてを含んでいると言えます。

----

スーザン:すべてにおいて自分の考えを持っていなければいけないと思いますが、残念なことに多くの生徒達は自分の考えを持っていません。例えば、“あなたはどう思いますか?”と私が質問すると“わかりません”と答えます。実はそれが問題だと思います。生徒の思考力や感情を成長させることが必要です。

生徒の考え方を成長させるためには、先生たちは強い心と精神力の生徒を育てる為に努力しなければいけません。

----

ソーニャ:これが日本の教育制度全部ですか？

スーザン:はい

ソーニャ:英語の授業で心が成長すると思われませんか？

スーザン:はい、中学3年生の教科書の中に

----

スーザン:昔の日本では、人々は感謝の言葉をどこでも表していました。しかし今の日本ではあまりそれが見られません。

ソーニャ:本当ですか

スーザン:はい、残念ながらそれが問題点だと思います。

ソーニャ:どうして今の日本人は感謝の言葉を言わなくなったのでしょうか？

スーザン:とても難しいですが...今の日本では物も情報も溢れています。昔に比べると簡単に欲しい物が手に入るようになりました。結果として感謝の心が欠けてきたんだと思います。

これまでの話をまとめると、日本の先生というのは教科を教えるという本来の教師だけでなく、生徒を良い人間に育てるという親の役割もあるということがわかります。

このような環境は、序義のような生徒にとって慣れることは大変なことです。

## EPISODE 1 TRANSCRIPT - 日本語

----

ソーニャ：どちらの教育方針がいいと思いますか？

丞治：日本の制度では勉強するのに時間がかかってしまうので僕にとっては勉強しづらいです。バスケ部に入っていたんですが、僕は良い部員ではありませんでした。毎日問題を起こすので先生にいつも怒られてました。結局、追い出されはしなかったんですがクラブにいるのが嫌になって辞めてしまいました。

ソーニャ:それは大変でしたね、日本の教育の仕方に良い所はあると思いますか？

丞治：まだ良い所はまだわかりません。中国にいた時には、好きなことが何でもできて本当に僕は自由でした。でも日本に来たら、学校生活は自由ではないので本当に大変です。

例えば、このボタン.....

ボタンというのは丞治の制服の第一ボタンのことです。

----

丞治：この第一ボタンを開けておくと大変なことになります。先生に見つかりと注意されるし、誰かが街で見かけたりすると告げ口されたりします。

丞治は校内規則が好きではありません。しかし日本では制服の第一ボタンまで閉めるというような規則までも大切なんです。

----

ソーニャ:教え方はどうですか？日本の先生と海外で以前に教えてもらっていた先生の教え方に違いはありますか？

丞治：教え方は同じだと思います。でも生徒がわからないことがあれば先生はわかるまで教えてくれます。放課後も残って教えてくれるんです。この日本のスタイルは良いことだと思います。外国の先生達は僕たちが勉強面で優秀であればいいんです。先生たちは毎日勉強しなさい、勉強しなさいと言うんです。勉強しなければいけないのはわかっているんですが、実は僕はそんなに勉強が好きではないんです。

丞治はそんなに勉強が好きではありませんが、インタビューの中で英語が上手になりたいと打ち明けてくれました。

## EPISODE 1 TRANSCRIPT - 日本語

----

丞治：スピーキングが上手になること、そしてライティングを上達させたいです。

ソーニャ：なぜ英語を上達させたいんですか？

丞治：なぜなら中国は世界で1番大きな国で、人口が多い国です。僕にとって中国人とコミュニケーションするのは楽なことです。でも将来のことを考えるとやはり英語です。将来はアメリカの大学に留学して、日本に帰国したら英語の先生になりたいと考えています。

ソーニャ:そうですね

丞治：はい

ソーニャ:どうして英語の先生になりたいんですか？

丞治：英語が好きで教えることも好きだからです。留学は英語の先生になるために自分の英語を上達させるチャンスだと思います。

ソーニャ:日本で英語の先生になりたいと考えているんですか？

丞治：はい

ソーニャ:どうして他の国ではなくて日本なんですか？

丞治：日本人の英語は発音が正しいとは言えないと思います。

ソーニャ:日本人特有のアクセントがありますね。

丞治：そうですね、例えば“apple”の場合だと“appuru”と発音します。この発音は正しいものではありません。僕は日本人の英語の発音を正しい発音に近づけるようにしたいと考えています。

----

ソーニャ：日本での英語教育は中国と比べてどうですか？

丞治：中国の方がいいと思います。英語や他の言語を上手になるには、身近に上手に話す人がいることが必要です。例えば、英語のスピーキングを上手になりたいと思っているの

## EPISODE 1 TRANSCRIPT - 日本語

で、身近に英語を上手に話す人がいればいいと思います。でも、クラスの中では、そんなに上手に英語を話す人はいません。書き方を知っている人はいますけど。もし中国でインターナショナルスクールにいたら、中国人だけでなく中国人とアメリカ人のハーフやアメリカ人も大勢いて、英語がとても上手です。そういう環境にいと自分も英語を上達したいとさらに思います。

ソーニャ :ところで、英語の先生についてはどう思いますか？話しかけたりしますか？

丞治：はい、話はします。でも先生たちは日本人的アクセントがあるので、自分の発音も変になる気がします。僕はシャイなのネイティブのきちんとした発音をすると先生たちは、“わー、君はすごいね、かっこいいね”と冷やかされます。僕はシャイなのでそういう反応は好きではないんです。

ソーニャ :先生より発音がいいので恥ずかしく感じたんですか？それともシャイだから？先生のメンツをつぶしてしまうからですか？

丞治：たぶん僕のスピーキングは学校の先生達より上手だと思います。でもただ先生のレベルに合わせています。

ソーニャ:どれくらい頻繁に英語を使いますか？

丞治：全然使いません。ALTが中学に来たときだけです。

ALTとはAssistant Language Teacher (外国語指導助手) のことです。ALTは日本の学校で英語教師とチームを組んで授業を行ったりします。ほとんどの場合、英語を母国語とする人です。

----

丞治：英語を話すことはありませんが、英語を忘れない為に、ハリーポッターのような本を大きな声で音読しています。

ソーニャ：他の生徒たちも同じような考えだと思いますか？

丞治：クラスメートはあまり英語を上手に話さないなので、僕とは違うと思います。

英語を単に勉強することと実際に話すことは同じでしょうか？序義が言っているように2つは全く別物です。スーザンもこのように答えています。

## EPISODE 1 TRANSCRIPT - 日本語

----

ソーニャ:英語を学ぶ上で最大の課題は何だと思いますか？

スーザン:英語をもっと使わせることです。その状況で自信を持って自分の意見を言えるように助けたいと思います。しかし、わたし達は日本人だし、日本の学校なので英語を使うことはとても難しいです。

ソーニャ:年齢によって違うと思いますか？

スーザン:はい、年齢が低い方がいいですね。

ソーニャ:どうして若い方がいいんですか？

スーザン:恥ずかしいと感じないからです。

恥ずかしさ、日本人は恥を重視しているのは知られています。少し前にスーザンが心について何と言ったか覚えてますか？

----

スーザン:ある生徒たちは自分の意見がありません。“あなたはどう思いますか？”と質問しても、自分の意見がないので“わかりません”としか答えられません。それが問題だと思います。生徒の思考力を成長させなければいけません。

生徒たちは英語を使うことを恥ずかしく思います。日本語でも自分の意見を言ったり他の人とコミュニケーションをとるのが難しいです。このことを知っていると日本での外国語を学ぶ目的は興味深いものになります。

文部省の中学校指導要領によると、“生徒たちの実際的コミュニケーション能力、スピーキング、リスニングなどを伸ばすためには、外国語を通してその言語や文化への理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ること”と定義されています。文部科学省によると、外国語を学ぶ為の目的は、言語を学ぶだけではありません。最初の分に書かれているように、“実際的コミュニケーション能力を養う”とあります。日本の英語教育の目標点は生徒自身が成長することであり、また自分を表現することも含まれています。

もちろん、学校によって先生によっても教え方は違います。この考え方は違う環境、外国で教育を受けた生徒にとっては慣れるのが難しく感じます。

## EPISODE 1 TRANSCRIPT - 日本語

----

ソーニャ：今の英語の勉強方法は気に入ってますか？

丞治：はい、少し変だと感じることもありますが、楽しんでます。

ソーニャ：旅行でどこかへ行きたいですか？

丞治：はい

ソーニャ；どこへ行きたいですか？

丞治：ニューヨークです。NBAの試合を見たいんです。またニューヨークはアメリカで一番大きな町です。静岡はあまり高いビルがないので、高い建物を見たり、買い物したり、ホットドックやハンバーガーを食べたりしたいです。きっと楽しいですよ。

そうですね、ある場所を新しい観点から見るのはわくわくする体験になりますね。

インタビューに答えてくれた序義とスーザンに感謝します。このポッドキャストでは、これからも言語、学ぶこと、日本での生活についてのトピックも取り上げていきます。静岡スピーククスのソーニャ・ポールでした。聞いてくださってありがとうございました。